

戦国期上総国小西原氏の動向と千葉氏権力

石 渡 洋 平

はじめに

戦国大名と「国衆」の関係をいかに位置づけるかという課題は、現在の戦国史研究において活発に議論されている問題の一つといえよう。⁽¹⁾ 筆者は、これまで下総千葉氏の家中にありながら独自の領域支配を展開していた、下総国分氏や下総海上氏の実態を追究してきた。⁽²⁾ 加えて、もともとは千葉氏の直臣にありながら領域支配を展開するに至った上総山室氏についても検討した。⁽³⁾

これらの成果は、戦国期の下総千葉氏がいかなる地域権力であるかを家中の視点から追究しようとした試みであり、戦国期の領域権力のあり方を明らかにすることも目的としている。しかし、その全体像の把握はまだまだ今後の課題となっているのが現状であろう。

そこで、本稿では千葉氏の家宰で小弓（のちに白井）を本拠にした原氏の一族である小西原氏について検討する。⁽⁴⁾ 小西原氏についてのまとまった研究成果は『大網白里町史』があるぐらいだが、高橋健一氏の研究や、小西にいた芸能者を追究した浜名敏夫氏の研究などによって徐々に小西原氏の動向もわかってきている。また、小西原氏の本拠・小西城（千葉県大網白里市）については発掘調査の成果が報告され、その様相が明らかになりつつある。⁽⁸⁾

ただし、系譜関係ひとつとっても見解が分かれている部分もある。これは、小西原氏の関係文書がきわめて少ないと言わざるを得ないというのが最たる問題だろう。たとえば、武家領主研究の基本となる発給文書が一点も確認されていない。すなわち、歴代当主の支配のあり方や活動時期など基本情報を知ることが困難な状況にある。

そうしたなかで、松戸市平賀の本土寺に残された「本土寺過去帳」及び本土寺関係資料に小西原氏が多く確認される⁽⁹⁾。これは、長禄二年(一四五八)に小西原氏の胤継が本土寺九世・妙高院日意上人を迎えて、自邸を寺に改めて日蓮宗寺院正法寺を開いたことが関係している。

「本土寺過去帳」を使用しての系譜復元は『大網白里町史』などですで行われているが、見解を異にする部分もあるので、改めて検討したい。

加えて、冒頭で述べた「国衆」研究進展をはかる意味でも、小西原氏を「国衆」研究の視角から考えてみる。

一 系譜関係の復元

本節では、「本土寺過去帳」などの関係史料をもとに系譜復元を行う。なお、現在考えられている系譜と筆者試案の系譜の差を明確にするため、『大網白里町史』の系譜を図1として、筆者試案の系譜を考察のうえで、図2として提示する。検討にあたっては関係記事を抄出し、人物ごとに考察し、系譜の復元をする。

初代・原胤継

小西原氏の初代は、原胤継という人物である。本土寺過去帳と日意上人の弟子である日晴上人の記録には次のようにある。

・「廿八日〔原肥前入道行〕朝 同十三辛丑三月〔本土寺過去帳〕⁽¹⁰⁾

糸城（千葉県君津市）を本拠にした国衆である。⁽¹⁵⁾つまり、小西原氏と秋元氏は、姻戚関係にあったのである。

両氏が姻戚関係を結んだ契機は何だろうか。胤継の死去年齢が不明のためはっきりしたことは言えないが、時期はちょうど正法寺を開いたあたりで、小西と小糸の地域的な関係を考えると（地図参照）、享徳の乱による上総真里谷への武田氏入部や里見氏の安房入部が想定できようか。両氏が互いの存立をはかるために姻戚関係を結んだとも考えられるが、これ以上の推測を補強する材料がないのが現状である。

二代・某

胤継の跡を継いだ人物については、諸書で混乱がみられる。現在、胤隆説・孝景説が提示されている。

胤隆説は『大綱白里町史』が採用している。江戸時代に成立した「千葉大系図」によれば、胤継の子は「行朝」とされ、その事跡は小弓城を本拠にした家宰原胤隆のものとなっていて、記載の混乱がみられる。のちの時代に作成した系図だけに信頼はおけない。ただし、胤隆は庶子もしくは養子・養弟の立場で小弓原氏の家督を継いだと考えられているので、⁽¹⁶⁾もとは小西原氏の子で小弓原氏へ養子に出された可能性は残る。

孝景説は高橋健一氏が提示した説である。根拠としたのは、次に掲げる史料である（波線は石渡）。

・「廿四日 院勢比丘尼 小西大方 文明十五年癸卯四月」（本土寺過去帳）⁽¹⁸⁾

・「悲母院勢御持経也、孝子左京亮奉持之、文明十五年癸卯月廿八日」（本土寺藏妙法蓮華經奥書）⁽¹⁹⁾

・「仍結縁人数原左衛門景広 同左京亮孝景 同万五郎忠継」（明応三年（一四九四）日蓮聖人真筆感得記）⁽²⁰⁾

これらの史料から高橋氏は、胤継の室・院勢尼に孝景という子がいることを指摘した。この人物が胤継の後継者とも考えられるものの、問題点として、孝景という名のうち「景」が弥富（千葉県佐倉市）を本拠にした原一族の通字であること、「孝」が当時の千葉氏当主孝胤からの一字拝領と考えられること、つまり孝景は弥富原氏である可能性がきわめて高いこと

があげられる。⁽²¹⁾ 院勢尼に孝景という子がいたという事実は揺るがないが、小西原氏の家督を継いだとは言えない。

そうすると、孝景と同じ史料にみえて、胤継と同じ「継」の字を持つ忠継が候補にあがる。しかし、これも室の問題で採用できない。というのも、永正五年（一五〇八）の本土寺華籠銘に「小西大方 正中逆修」とみえ、同じ時代の別の華籠銘に「忠継」も確認される一方、⁽²²⁾ 忠継の次に小西原氏の跡を継いだと考えられる小西能登守光信の母として「暁源尼小西能登守殿母儀」（本土寺過去帳十二日条）がみえるからである。⁽²³⁾ この点、高橋氏も指摘しており、正中の位置づけを保留している。つまり、このままだと忠継に二人の室（正室）がいることになってしまふのである。⁽²⁴⁾

こうした矛盾を解決する試案として、実名不詳の「某」という人物が家督に就いていたという説を提示したい。室は、正中でその子が忠継と推測する。

三代・満五郎忠継

忠継は前掲の日蓮聖人真筆感得記と華籠銘のほかに、永正十一年（一五一四）十一月十五日付けの日遊御自筆御消息日記に「小西原満五郎」とあり、音が通じることから万五郎忠継と推測でき、小西原氏ということがわかる。⁽²⁵⁾

初代・胤継死去が文明十三年で、忠継はその十三年後に活動がみえる。前述したように忠継に前代に「某」がいたと考えると、忠継は三代目の小西原氏当主と想定できる。「某」が家督に就いていた時期は短期間だったのだろう。

なお、「本土寺過去帳」に忠継はみえないが、某年六月十三日に死去している「遊源位 原肥前守」は忠継のことかもしれない。⁽²⁶⁾ 肥前守は胤継が称していたことからみれば、小西原氏当主が継承する官途であろうし、忠継の活動していた時期の本土寺の住持が日遊であったからである。

妻は次代原能登守光信の母と「本土寺過去帳」にみえる「暁源尼」が該当する。なお、『大綱白里町史』では「本土寺過去帳」十日条の「慈父蓮孝逆修 悲母理寿小西御上ノ父母 大炊助蓮持」という記述をもとに、⁽²⁷⁾ 暁源尼の父母・兄弟に蓮

孝・理寿・蓮持を想定している。蓮孝は同史料で永正八年(一五二一)十一月十四日に死去していることが分かるので、忠継より一つ上の世代に位置するだろう。そうすると、先行研究どおり暁源尼の父と考えられる。また、蓮持は文明十六年十一月十一日に死去している⁽²⁹⁾ので、暁源尼の兄で早くに没したと推測できる。蓮孝と蓮持は「狩野」「伊北狩野」とあるので、上総国伊北庄(千葉県いすみ市)を拠点にしていた伊北狩野氏と分かる⁽³⁰⁾。小西原氏の忠継と伊北狩野氏出身の暁源尼の婚姻の時期や契機は不明だが、両者とも「本土寺過去帳」に記されていることから、日蓮宗信仰を媒介としたつながりがあったと想定しておきたい⁽³¹⁾。

四代・光信

忠継のちに小西原氏と推測できる人物が光信である。光信は次に掲げる史料において、正法寺で祈禱に関わっており、子息が小西原氏歴代の肥前守を称している⁽³²⁾ので、小西原氏としてよいだろう。光信は四代目当主にあたる。

・「大旦那原光信子息肥前守為祈禱也云々於小西正法寺集之」(大永七年(一五二七)五月十二日 平賀本奥書・二十六)⁽³²⁾
 ・「十八日 日陽尊位 原能登守法名光信 天文十辛丑四月」(本土寺過去帳)⁽³³⁾

光信は実名不詳で能登守を称し、天文十年(一五四一)四月十八日に没したことが分かる。「正法寺本原繼図」によれば、肥前守と能登守は別系統であり、どうもこの段階で別系統へ小西原惣領家の家督が継承されたようである。しかし、子息が肥前守を称しているので、小西原氏の庶家が一時的に家督を代行していたのかもしれない。

室は「本土寺過去帳」に「廿日 妙寿位 小西能登守殿御内セナ」とある妙寿である⁽³⁵⁾。なお、妙寿の母は「本土寺過去帳」二十四日条に「能登殿御内母」とみえる妙行だろう⁽³⁶⁾。

五代・肥前守(行源か)

『大網白里町史』によれば、光信の跡は日源（能登守、永禄十三年（一五七〇）没）とされる。光信の跡に家督に就いて活動していたとすれば、年代的には矛盾はない。しかし、四代光信の子息肥前守をどう考えるかが問題として残る。仮に、肥前守が能登守・日源として、肥前守が父能登守死去後に能登守になったということになるだろうか。

判断が難しいところではあるが、官途が異なることから、光信子息肥前守と日源は別人物と考えておきたい。このように考えた場合、「本土寺過去帳」で某年某月二十二日に「行源成等正覚 小西原肥前守」とみえるのは、この肥前守だろうか。なお、肥前守の室は「本土寺過去帳」十八日条に「原肥前殿ノ上 法行尼 天正十二甲申正月辺田ニテ」とある法行尼の可能性が高い。⁽³⁸⁾

六代・日源（胤次か）

肥前守（行源か）の跡を継いだのが年代的に日源だろう。

・「十日 日源 小西能登守 永禄十三年庚午八月、千葉寺下ニテ打死」（本土寺過去帳）⁽³⁹⁾。

小西能登守は、原能登守であり、永禄十三年（一五七〇）八月十日に死去していることが分かる。この時期、安房里見氏が小弓城を攻めており、この合戦において原能登守は千葉寺下（千葉市中央区千葉寺町）で討ち死にしたのである。⁽⁴⁰⁾

なお、「千葉大系図」には行朝の子として隼人佐胤次がみえる。⁽⁴¹⁾ この記事は世代などで信頼できないが、千葉妙見社の天文十九年（一五五〇）十一月二十三日の遷宮の記事にみえる「原隼人佐胤次」は日源のことかもしれない。⁽⁴²⁾ 大永七年段階で五代目は官途肥前守を称しており、この時期の小西原氏で該当する人物が日源に限られるからである。

なお、日源は「妙本寺大堂常什回向帳」⁽⁴³⁾に小西原氏歴代では唯一その名があることから、日蓮宗への篤い信仰があったといえる。

室は「本土寺過去帳」に「廿三日 妙蓮尊尼 白井御谷ノ上 小西殿御老母 天正十六戊子九月」とある妙蓮だろう。⁽⁴⁴⁾

七代・小西殿

七代目は日源の戦死を受けて家督を継承した人物で、前述した天正十六年段階で当主であった「小西殿」と考えられる。おそらくは、天正十八年（一五九〇）の小田原合戦での北条家・千葉家・原家の滅亡時における当主だろう。

室は、「本土寺過去帳」に「三日□（小）西大方 妙上靈位 慶長七壬寅五月 池上ニテ」とみえる妙上が时期的に符号すると考えられる。⁽⁴⁵⁾ 室は小西原氏滅亡後も生き残り、慶長七年（一六〇二）に死去したことが分かり、場所が池上（東京都大田区池上）であることから、小西原氏が滅亡後は小西を離れたと推測できる。⁽⁴⁶⁾ なお、

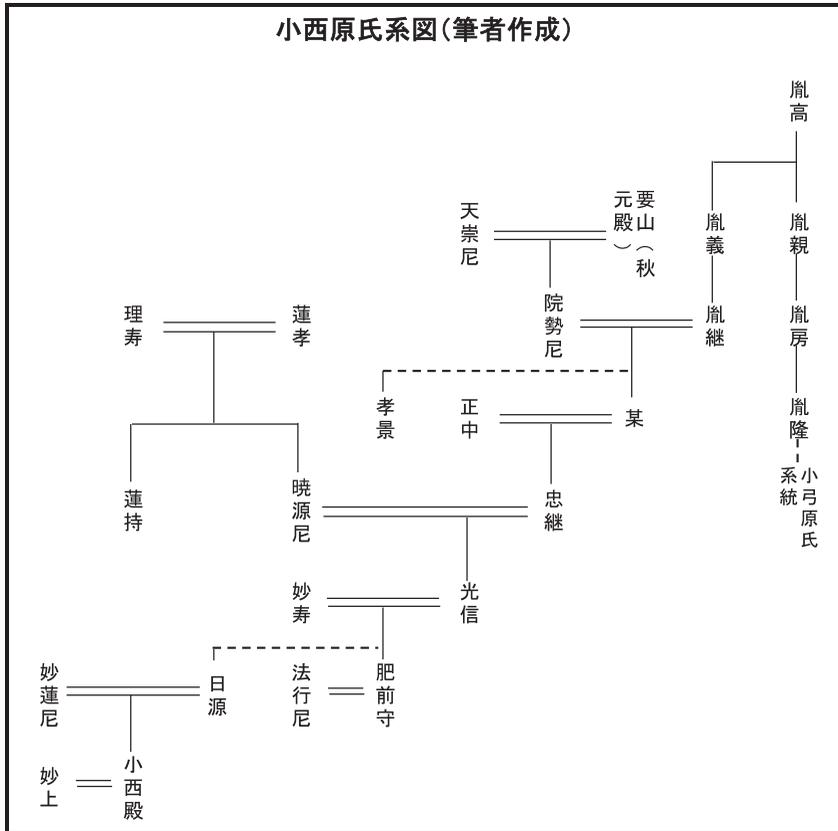


図 2

「妙本寺大堂什常回向帳」⁽⁴⁷⁾にもその名がみえることから、日蓮宗への篤い信仰があったのだろう。

〔小括〕

以上、「本土寺過去帳」を中心に、小西原氏の系譜関係の復元を行ってきた。小西原氏については、各当主の没年がすべて分かるわけではないので、系譜復元は難しいが、先行研究とは異なる系譜を想定できた。

そのなかで、秋元氏との姻戚関係は領域権力として存続するための方策と考えたほか、伊北狩野氏との婚姻は日蓮宗信仰を介したものと想定した。いずれも推測の域を出ないが、遠隔地の諸領主との婚姻をいかに考えるかは重要な問題である。また、孝景や妙蓮のように、ほかの原一族とのつながりも系譜復元を行うなかでみえており、原一族のネットワークがあったと推測できる。原氏は本土寺の華籠銘にみえるように、同族のつながりがみえ、原氏同士のネットワークをさらに追究しなければならないだろう。

二 「国衆」の視角からみた小西原氏

本節では小西原氏について、近年の研究が進んだ「国衆」の視角から考えるとともに、小西原氏が果たした役割を検討する。なお、千葉氏領国では筆者がこれまで検討してきたような国分氏・海上氏のように千葉氏家中にありながらも、千葉氏とは別に独自の領域支配を展開していた存在が確認されている。⁽⁴⁸⁾例えば、小田原北条氏と他国衆の場合は、北条氏家中には含まれないが、千葉氏では家中に含まれる点の特徴である。

(1) 領域支配について

千葉氏領国の場合、独自の領域支配をしていたかどうかは、その領主が千葉氏の承認を得ないかたちで文書を発給して

支配を展開しており、かつその領主の支配領域に千葉氏の文書が出されていないかが判断材料となる。この点、小西原氏の場合は千葉氏の発給文書は確認されないが、同時に小西原氏の発給文書も確認されない。よって、小西原氏が独自に領域支配を展開していたかは分からないのである。

ただし、小西原氏が置かれていた地域は、千葉氏領国では最前線であり、国衆土気・東金酒井氏と対峙していたことが分かる。⁵⁰このように、最前線に位置した存在として千葉氏御一家で鳴戸（成東）にいた鳴戸千葉氏があげられる。⁵¹酒井氏は自らの領国と家中の存立のために、北条氏・千葉氏・原氏に味方したり、その敵である里見方に転じたりと常に緊張状態にあった。小西原氏はこのような国衆酒井氏と対峙し、常時その動きを監視する立場にあったと推測できる。加えて、酒井氏が千葉方に服属する際は、諸々の交渉も担っていたと推測できる。

独自の領域支配を展開していたかは分からないものの、小西領ともいべき小西城を中心とした地域（土気酒井氏と東金酒井氏に挟まれる地域で、おおよそ現在の太網白里市域に相当しよう）を管轄していたと考えてよいだろう。

小西原氏は前述の千葉妙見社の記事でみられるように、千葉氏家中に含まれていた。あくまで千葉氏の家中にあり、軍事的支配下にあった存在ではあったが、小西原氏は一定の領域を管轄し、千葉氏のもとで支配にあたっていたといえる。

（2）家中の存在

国衆の特徴として、家中を有していたことがあげられる。小西原氏はすでに先行研究で明らかになっているように、千葉氏・家宰原氏とは別個に独自の家中を有していた。この点、「本土寺過去帳」には実に多くの小西にいた人々がみえる。受領・官途名付きでみられる一族として、江口・志賀・高橋・錦服・田中・田鍋各氏があり、殿付けの一族として行木・加瀬・香取各氏⁵³がいた。これらの名字は小西城周辺に残っているものが多いとも指摘されており、小西原氏の家中であったと推測される。さらに、官途・受領・殿といった面から、小西原氏の家中でも上位に位置するような一族であったのだ

ろう。なお、永祿十三年の日源死去の際に、志賀弥三郎と中間妙道が同じく討ち死にしている。⁽⁵⁵⁾これは当主とともに軍事行動をしていた証拠となる。

また、小西以外にも大網白里市山口に設楽氏がいた。設楽氏のうち、設楽継長（本土寺華籠銘）などは小西原氏同様、「継」の字を使用している。⁽⁵⁶⁾これは小西原氏からの一字拝領かもしれない。小西とも地理的に近く、小西原氏を支えた存在といえよう。

以上のように、小西原氏は小西衆とでも呼ぶべき家中を有していた。これは、小西原氏が国衆に近い存在である証左となるのである。

(3) 領の形成と寺院

では、こうした家中を有した領域権力としての小西原氏と支配領域（小西領）はどのような契機で形成されたのだろうか。この点、黒田基樹氏が土気酒井氏の動向を検討するなかで、土気酒井氏が享徳の乱当初に対立関係にあった小弓原氏に従う過程で小西原氏と激しい抗争があったと推測していることが注目できる。⁽⁵⁷⁾小西原胤継は享徳の乱当時の小弓原氏当主の胤房の従兄弟にあたる。原胤房は享徳の乱で庶家の馬加千葉康胤を擁立した主体であり、結果的に惣領家を滅亡させる。

つまり、小弓原氏は信頼できる一族を敵方と戦ううえで重要な拠点に送り込んだといえるのではないか。これは弥富原氏にも共通するといえる。⁽⁵⁸⁾小西領は享徳の乱という戦乱状況に対応するために入部した小西原氏が小西の地を支配するなかで形成されていったと推測できよう。

さらに、そうした領形成の核になったのが寺院の存在である。前述したように、小西では原胤継が、長祿二年（一四五八）に本土寺九世・妙高院日意上人を迎えて、日蓮宗寺院正法寺を開いた。これは享徳の乱のさなかであり、小西原氏が

戦乱状況にあつて入部し、その後寺院の建立がされたということである。実は、弥富原氏も同時期に日意を迎えて弥富に勝興山長福寺を建立している。⁽⁵⁹⁾

享徳の乱のなかで本土寺は有力な檀越である曾谷氏が衰退し、戦火にも遭つてしまった。こうしたなか、日意は原氏との結びつきを深め、本土寺の復興に尽力していたのだ。⁽⁶⁰⁾「日蓮聖人真筆感得記」という史料をみることで分かるように、本土寺の復興に尽力したのは原氏の一族であり、小西の土豪層であつた。この土豪が小西原氏の家中に組み込まれ、⁽⁶¹⁾正法寺の檀家になつたりしたのであつた。領の形成と同時期の寺院建立は、領における結集の象徴となり、家中形成に少なからず影響を与えたといえよう。

加えて、本土寺の教線が伸びることによつて、本土寺のもとにいた猿楽集団の活動も広がり、小西にも猿楽集団が形成されたのであつた。⁽⁶²⁾小西は千葉氏領国における最前線という戦時の重要拠点でありつつ、猿楽集団も活躍する文化的にも発展していた地域であつた。そうした小西領形成は、日意上人による教線拡大と密接に関係したのである。

小西は浜名敏夫氏が指摘するように、江戸湾の海上交通にも関わり、⁽⁶³⁾陸上交通上でも東金と土気の間であり、土気から小弓へとつづく上総道ともいふべき当時の主要街道上に位置した重要拠点であつたのだ。⁽⁶⁴⁾

領の形成は戦乱状況への対応が注目されているが、こうした宗教的な側面や交通上の問題、そこから派生する文化的な面など総合的な視角で検討することが必要なのである。

おわりに

本稿では千葉氏権力のあり方を家中から考えるということで、小西原氏について検討した。「はじめに」で掲げた課題の結論について、系譜関係は第一節に図で示した。小西原氏の場合、史料的制約が大きいため各当主の活動時期などは詳し

く分からないものの、残された史料から復元を試みて、先行研究とは異なる結論を示した。しかし、今後も既知の史料の見直しのみならず、新出史料の発掘に努める必要がある。

「国衆」の視角からみた小西原氏は、これまでに検討した国分氏や海上氏と比べて、発給文書の存在が確認できないことから判断が難しいものの、小西城を拠点に領域支配を行い、小西衆ともいうべき家中を有していた権力と推測した。小西原氏は「国衆」に近い存在であるものの、千葉氏の家中に包摂されてもいた。加えて、本土寺華籠銘や系譜でみたように他の原一族とのつながりがみえ、惣領家である小弓(臼井)原氏のもとで活躍していたともいえる。

こうした「国衆」の支配領域形成に関して、寺院の建立が果たした意味も考えた。小西原氏の場合は、戦乱への対応ということで小西に入部したが、小西領形成のうえで家中の結集の場ともなる寺院が同時期に建立されていたのであった。これは小西に限らず、別の原一族でも確認でき、時期的に本土寺日意上人による本土寺復興と教線拡大と密接に関連したことであったのである。

筆者はこれまで神社との関係のなかで領域権力を考えたことがあるが、⁽¹⁶⁾ 今後は本土寺をはじめ寺院勢力と「国衆」の展開を結びつけることなどを行うことで、総合的な視角のもと戦国大名と「国衆」の関係を追究していくことを課題とすることを明示し、攔筆したい。

註

- (1) 岩田書院刊行の「論集 戦国大名と国衆」に代表される。また、全国規模での国衆研究活性化をはかるという目的のもと、二〇一七年七月十六日に「戦国期における大名と「国衆」というシンポジウムが開催された。こうした動きを促進していく意味でも個別的事例を重ねていく必要がある。

- (2) 拙稿「戦国期下総国分氏における矢作惣領家と庶流」(『十六世紀史論叢』創刊号、二〇一三年)・同「戦国期下総海上氏の展開と動向―一族・家中・領域支配―」(『駒沢史学』第八三号、二〇一四年)。
- (3) 拙稿「戦国期上総国における国衆の成立と展開―山室氏を中心に―」(『駒沢史学』第八六号、二〇一六年)。
- (4) 小弓・白井原氏については、黒田基樹「戦国期下総国の政治構造に関する一考察―白井原氏の基礎的検討―」(同「戦国期東国の大名と国衆」、岩田書院、二〇〇一年、初出一九九六年)などを参照。
- (5) 「大網白里町史」(大網白里町、一九八六年)のうち、第一部第二章第六節「戦国末期の原氏の動向」(伊藤一男氏執筆)・同第七節「大網白里町の城館址」(小高春雄氏執筆)。
- (6) 高橋健一「本土寺蔵「華籠」銘の人物をめぐる」(『枝折』第二編、一九九四年)。以下、本稿での高橋説はこれに拠る。
- (7) 浜名敏夫「中世房総の芸能と原氏一族―本土寺過去帳の猿楽者―」(『中世房総』第五号、一九九一年)。以下、本稿での浜名説はこれに拠る。
- (8) 最新の動向については、井上哲朗「大網白里市小西城跡の発掘調査成果から」(第三六回千葉歴史学会大会報告資料)がある。
- (9) 本稿では、『千葉縣史料中世篇本土寺過去帳』(千葉県、一九八二年)を使用する。以下、引用は『過去帳』該当頁とする。なお、過去帳による系譜復元をおこなうが、あくまで戦国時代の小西原氏に限ったものであることを断っておく。
- (10) 『過去帳』二八五頁。「」は写本による補足である。
- (11) 『松戸市史』史料編4本土寺史料(松戸市立図書館、一九八五年)一二号。以下、同書からの引用は『松戸』該当番号とする。
- (12) 「日意上人曼荼羅本尊」。『本土寺と戦国の社会』(松戸市立博物館、二〇一七年)一八頁に写真が掲載されている。
- (13) 『過去帳』二四七頁。年月のあとに「同妙少童子」とあり、同日に母子が死去したのかもしれない。
- (14) 『過去帳』二一六頁、一五五頁。
- (15) 秋元氏の概要は、拙稿「秋元氏」(大石泰史編『全国国衆ガイド』地元の殿様たち)、星海社、二〇一五年)で示した。
- (16) 「千葉大系図」は『改訂房総叢書第五輯系図・石高帳・雑書・抄本・索引』(改訂房総叢書刊行会、一九五九年)所収。
- (17) 前掲註(4)黒田論文。
- (18) 註(13)に同じ。
- (19) 『本土寺と戦国の社会』(松戸市立博物館、二〇一七年)二五号。

- (20) 同右二六号。
- (21) 弥富原氏については、遠山成一・外山信司「岩富原氏の研究」(石橋一展編著『下総千葉氏』、戎光祥出版、二〇一五年、初出一九八六年)。
- (22) 『松戸』二一号。
- (23) 『過去帳』一一九頁。
- (24) 正室や側室で別という考えや室と子の母が一致しないという可能性もあろうが、次期当主の母と想定し、室(正室)が二人という表現をしている。
- (25) 『松戸』八号。
- (26) 『過去帳』一三九頁。
- (27) 『過去帳』一〇〇頁。
- (28) 『過去帳』一四四頁。
- (29) 『過去帳』一一〇頁。
- (30) 伊北狩野氏については、小高清「伊北城と狩野氏」「伊北城と狩野氏(二)」(『総南文化』一四号・一五号がある)。
- (31) なお、原一族の弥富原氏も狩野氏との婚姻が確認される。註(21)論文参照。
- (32) 『松戸』九号・平賀本二十六。
- (33) 『過去帳』一八七頁。
- (34) 『大網白里町史』掲載のものによる。
- (35) 『過去帳』二〇三頁。
- (36) 『過去帳』二四四頁。
- (37) 『過去帳』二二五頁。
- (38) 『過去帳』一八九頁。
- (39) 『過去帳』一〇一頁。
- (40) 黒田基樹「千葉胤富・邦胤の政治動向」(『風媒花』No.25、二〇一二年)。

- (41) 前掲註(16)に同じ。
- (42) 「千学集抜粹」(黒田基樹・佐藤博信・滝川恒昭・盛本昌広編『戦国遺文』房総編補遺、東京堂出版、二〇一六年所収)。
- (43) 『大田区史』資料編神社2(大田区、一九八三年)一七五頁。
- (44) 『過去帳』二二九頁。
- (45) 『過去帳』三六頁。
- (46) あるいは池上本門寺との関係も視野に入れる必要がある。
- (47) 註(43)一八一頁。
- (48) 黒田基樹「下総千葉氏権力の政治構造」(同『戦国期領域権力と地域社会』、岩田書院、二〇〇九年、初出二〇〇五年)。
- (49) 国衆の理解については、ひとまず黒田基樹『戦国大名 政策・統治・戦争』(平凡社新書、二〇一四年)第五章を参照。
- (50) 土気・東金酒井氏の動向については、黒田基樹「千葉氏とその国衆」(同『戦国の房総と北条氏』、岩田書院、二〇〇八年、初出二〇〇七年)参照。
- (51) 黒田基樹「戦国期の千葉氏御一家」(『千葉いまむかし』No.24、二〇一一年)。
- (52) 『大網白里町南横川郷土誌』(南横川郷土誌作成委員会、一九九八年)・『千葉県教育振興財団調査報告 第七三二集 首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 二二三 大網白里市小西城跡』(国土交通省関東地方整備局千葉県国道事務所、千葉県教育振興財団、二〇一四年)(どちらも小高春雄氏執筆)など。
- (53) 註(52)に同じ。
- (54) 註(52)に同じ。
- (55) 『過去帳』一〇一頁。
- (56) 設楽氏については前掲註(6)高橋論文などを参照。
- (57) 前掲註(50)に同じ。
- (58) 前掲註(21)論文参照。
- (59) 前掲註(21)論文参照。
- (60) 日意については、松裏善亮「原氏と平賀本土寺日意 その一」(『原氏と平賀本土寺日意 その二』(『佐倉市史研究』五号、六号、一

九八六年・一九八七年)がある。

(61) 本史料については、外山信司「『日蓮真筆感得記』(本土寺文書)―弥富原氏の新資料―」(『佐倉市史研究』一六号、二〇〇三年)参照。

(62) 前掲註(7)浜名論文。

(63) 前掲註(7)浜名論文。

(64) この交通ルートについては、さしあたり拙稿「『家忠日記』にみる下総国の水陸交通」(『千葉史学』六二号、二〇一三年)参照。

(65) 拙稿「戦国期下総―宮香取社をめぐる地域権力―下総千葉氏を中心に―」(佐藤博信編『中世房総と東国社会』、岩田書院、二〇一二年)など。

〔付記〕本稿は平成二十八年九月十日に大網白里市保健文化センターでおこなった「戦国時代の下総原氏―御屋形を支えた家中の長―」の講座報告において検討した小西原氏の問題について、その後の知見を加えてまとめたものである。